

羽ばたく社南

創立三十周年記念誌



福井市社南公民館





笑顔あふれる緑の里



福井市社南公民館

社南公民館栄光の記録
第40回優良公民館文部大臣表彰
昭和62年11月5日



栄光の記録



社南地区防災アマ無線クラブ防災功労者内閣総理大臣表彰（平成22年9月1日）



社南体育振興会文部大臣表彰（平成6年10月10日）



社同友会文部科学大臣表彰（平成14年10月14日）

社南公民館歴代館長



初代館長 片岡 平

(昭和56年4月～62年3月)



第2代館長 山田 康高

(昭和62年4月～平成3年5月)



第3代館長 坪川 武雄

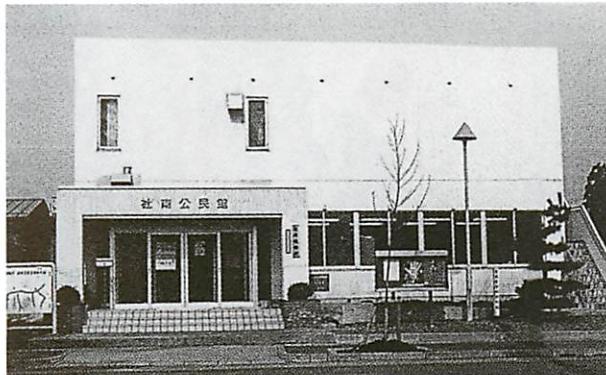
(平成3年7月～7年3月)



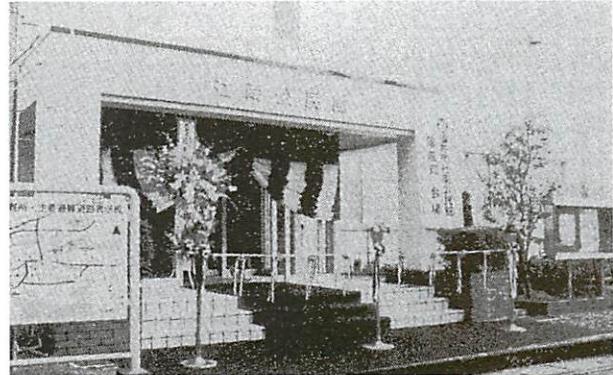
第4代館長 平馬文雄

(平成7年4月～17年3月)

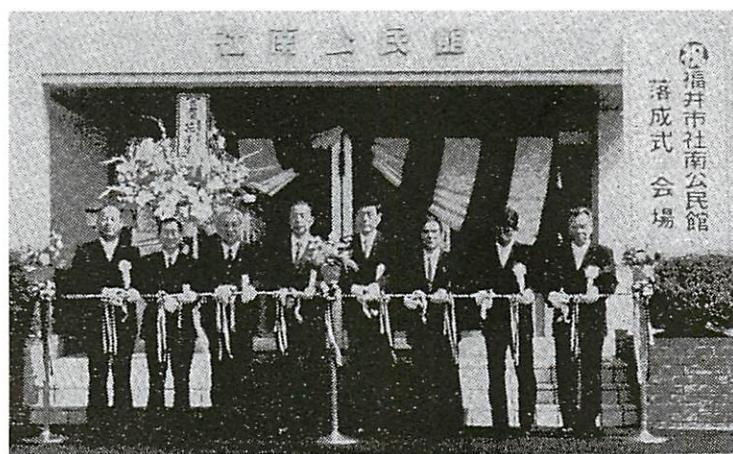
社南公民館新築・増改修工事



新築された社南公民館正面玄関(昭和56年4月1日)



増改修された社南公民館正面玄関(平成10年3月28日)



増改修工事 テープカット(平成10年3月28日)

市制100周年記念事業



人と文字撮影(平成元年7月23日 社南小学校グランド 於850人参加)

公民館の教育事業 生涯学習30年



青少年健全育成事業(少年学級)



パネルディスカッション
～私たちのくらしを考える～



豊かな地域づくり事業(社南塾)



家庭教育支援事業(ママたちの学園祭)



成人教育事業(壮年学級)



成人教育事業(婦人学級)



健康長寿事業(えもり学級)

ふれあい深める地域事業 納涼祭



福井フェニックス祭り みこしの部で社南手づくりみこしがフェニックス大賞受賞(平成7年8月4日)



民踊のタベ



子どもみこし



スコップ三味線

敬老会



アトラクション(民踊)

体育祭



開会式



会場風景



水くみ競争



アトラクション(保育園児)



むかで競走

公民館まつり



社南公民館20周年記念公民館まつり
(平成13年11月4日)



売店(ポップコーン)



自主グループ舞台発表(童謡を歌う会)



展示(赤ちゃん写真)



園児によるマーチング(社中央保育園)

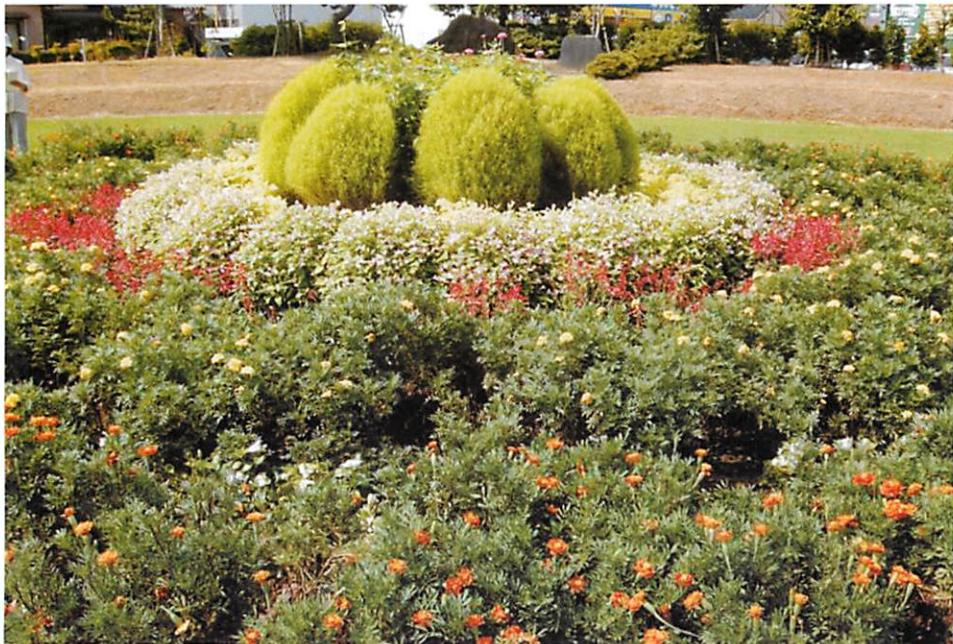


菊の展示

誇りと夢・わがまち創造事業
社南未来委員会



教育部会(城山登山)



環境部会(花壇コンクール)



環境部会(三世代クリーン作戦)



教育部会(親子ふれあいラジオ体操)

防災訓練



倒壊家屋救出訓練



市重点推進地区訓練（平成12年9月3日）



防災アマ無線クラブによる通信訓練



炊き出し訓練

社南シンボルマーク



花と水と緑の 美しいまら作り

シンボルマークの解説

赤色は、社南の花(松葉ぎく)や花いっぱい運動で育てられたもの。緑色は、社南の木(金もくせい)や街路樹の木。青色は、社南の人々の清らかな空のような心の色。

社南はこれらの3つにいつまでも守られている感じを表し作成された。

(平成9年12月8日決定 至民中学校 西島麻紀さんの作品)



ペットボトル約3,000個で作った
クリスマスイルミネーション

“みんなの公民館、みんなで考える公民館”そのためには、公民館の存在に気づいてもらうことから始まる。そのひとつの方 法としてイルミネーション(灯りとまちづくり)を考えた。

公民館の建物は殺風景でありきたりのグレー…そんなイメージを払拭し、この前を通り過ぎてしまう人の足を止めて季節感を感じて欲しい。そんな想いを込めたこの事業は、社南地区に住む福井大学生との出会いがきっかけとなり平成14年に実現した。まったくの素人達が手探り状態で始めたイルミネーションは、その後、地区的シンボルとして知られるだけでなく福井県内の様々な公民館に影響を与えた。

社南の花木の決定について（平成2年度）

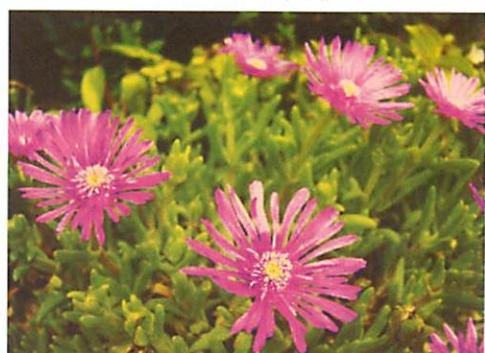
ふるさとおこし“42”事業に取り組むため、地区委員会を組織し種々検討した結果、地区を花咲く里にするため、社南の木は「金もくせい」に花は「松葉菊」に決定した。

《社南の木》



金もくせい

《社南の花》



松葉菊

季節の花300 <http://www.hana300.com/>
メールアドレス yyyyy300@gmail.com

社南地区のキャッチフレーズについて――

“笑顔あふれる緑の里”は至民中学校の生徒から134点の出品があり、その中から最優秀賞に三賀森 大我さんの作品が選ばれた。



記念誌発刊にあたって

社南公民館 館長

竹内 寛

社南公民館が創立30周年を迎え、ここに30周年記念誌を発刊するにあたりまして一言ご挨拶申し上げます。

社南公民館は、昭和56年4月に開館されましたが、歴史をさかのぼってみますと昭和29年4月に足羽郡社村が福井市に合併した後、昭和43年の福井国体を契機に地区人口が急激に増加、そのため昭和56年に社南と社北が分離。その後平成3年には社西が新たに分離することになり、現在に至っています。

以来、今日に至るまで30年の公民館活動の道のりは、時代の変遷、社会情勢の変化の中で言葉に尽くせないご苦労があったと思います。

これまでの長い年月、公民館の進展と共に歴史を積み重ね、現在の基盤を作りあげてくださった先人、先輩、社南地区の皆様方に心から敬意を表し感謝申し上げたいと思います。

この道のりを今回記念誌としてまとめる機会を得ましたことは、誠に意義深いことであります。

さて近年、社会を取り巻く環境は大きく変化しています。核家族化、少子高齢化、都市化の進展、人間関係、地域の絆の希薄化、家庭や地域の教育の低下など、いろいろな問題が指摘されています。

このような中、公民館は生涯学習の場、地域住民の集いの場、まちづくりの拠点施設として今後果たす役割はますます大きく重要になってきます。

30年をひとつの区切りとして、過去の業績を省み古きよき伝統、文化を継承しつつ、時代に対応できる公民館活動の充実をと意を新たにしています。

地域の人から「愛され親しまれる」公民館として、一人でも多くの皆さんに足を運んでもらえるよう一生懸命取り組んでまいりますので、今後ともご指導ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、30周年記念誌を発刊するにあたり、記念誌編集にご協力いただいた委員をはじめ、地域の皆様に厚くお礼申し上げ、発刊のご挨拶といたします。



発刊によせて

福井市長

東 村 新 一

このたび、社南公民館が創立30周年を迎えられ、ここに記念誌が発刊されますことを心からお慶び申し上げます。

貴公民館は、前身の社公民館を発展的に解消し、社南と社北に分割して昭和56年に創立されました。以来、教育事業を通じて人づくりや地域づくりを進めてこられ、地域の方々の身近な活動拠点として広く認知されているところです。これもひとえに公民館の運営や事業にご尽力いただいた関係者の熱意と努力、そして地域の皆様方の多大なるご支援の賜物であり、ここに心から敬意と感謝を表する次第でございます。

近年、生活スタイルの変化や生活圏の広域化などにより、地域における人間関係が希薄化し地域コミュニティの機能保持・活性化が重要な課題となっております。これから公民館は、これまで以上に学習を通して様々な生活課題の解決や生きがいづくりの場であるとともに、地域づくりの核となり、人と人を結び、情報をつなぐコーディネーターとして果たすべき役割は大きくなっています。

このような中、貴公民館では、各種の学級や講座を実施するほか、社南未来委員会をはじめとして子育て支援や自主防災活動などの地域活動への支援を積極的に行っておられます。活動を通して地域への愛着と誇りを育み、住民同士のつながりや交流を深めていくことで、社南地区がより住みよいまちになるものと思っております。今後も公民館が、これまで積み重ねてこられた人と人との絆を礎として、新たな未来を描く人づくりに邁進されることを期待しております。

最後になりましたが、記念誌の発刊にあたり、資料収集をはじめ、執筆や編集にご尽力賜わりました関係者の皆様のご苦労に敬意を表しますとともに、社南地区ならびに社南公民館の今後ますますのご発展を祈念申し上げまして、お祝いの言葉といたします。



発刊によせて

福井市教育長

内田高義

社南公民館が創立30周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

また、これまでの公民館活動を記念誌としてまとめられますことは、今日の生涯学習社会における公民館のあり方を考えるうえで誠に意義深いものであり、今後の公民館の更なる発展の礎となるものと存じます。

さて、公民館は社会教育の施設であり、公民館で実施される様々な事業も学習が基本となっています。教育事業を通して、一人ひとりが日常における課題に気付き、共に学び合うことで、その解決の手法を知り、また、多くの仲間と交わることができます。そして、これらを通して地域の様々な活動へと広がり、豊かで充実した社会生活につながっていくものと考えております。

このような中で貴公民館では、家庭教育支援や青少年の健全育成、健康長寿、政治経済などの暮らしに関わる様々な事柄を自分たちで学習する「社南塾」など各種の事業を積極的に展開されておられます。これらの事業での取り組み方法や内容は、工夫が凝らされており、先駆的で興味深いものとなっております。これらの事業に多くの方の参加を得られていることからも高く評価されているところでございます。

今日の急激な社会変化や時代の流れの中で、地域の学習の場、住民自治の拠点としての公民館の役割はますます重要となってまいります。これからも公民館が住民の皆様から信頼され、親しまれ、また、公民館に多くの方が集い、学び、憩うことで、地域の輪がますます広がっていくことを願っております。

最後に、社南公民館の今後のご活躍と大いなる飛躍を心よりお祈り申し上げますとともに、記念誌発刊に際し、ご尽力賜わりました関係各位に深く感謝申し上げまして、お祝いの言葉といたします。



記念誌発刊によせて

社南地区自治会連合会 会長

山 田 秀 実

社南公民館が創立して、30周年を迎えるにあたり、社南地区の皆さんと共に、地区公民館が非常に大きな役割を果たしたことは周知の通りです。また、自治会連合会・公民館運営審議会・諸団体等の皆さんの努力が、地域の文化形成に大きな影響を与えてまいりましたことは、言うまでもありません。今、社南公民館30周年のこの足跡を記録し、記念誌として発刊する運びとなったことは、誠に意義深く、歴史の重さを痛感すると共に本当にうれしく思います。

昭和25年足羽郡社村公民館が創立し、29年には福井市への合併とともに福井市社公民館になりました。そして、福井国体を契機に大世帯地区となり、社南・社北の2つの公民館に分かれました。このようにして昭和56年4月に誕生した社南公民館、その頃から道路が整備され福井市のベットタウンとして急速に都市化が進みました。そして、今や約4,200世帯、約13,000人が暮らすマンモス地区へと発展しました。

この30年の歴史は、地域住民の皆さんが、いろいろな立場で、いろいろな事柄でご協力をいただしたことによって、今日を築いて来られた足跡であり、地域の皆さんの連係プレーから生まれたものだと信じています。決して目立つことでも大きなことではなく、小さな一つ一つの活動が、地域住民の輪を広げ、豊かにしたのだと思います。30周年記念誌を発刊の節目にあたり、地区が更なる発展を遂げ、快く住み易い地区であり続けることを、皆さんと共に強く願う次第です。

今までにご尽力された諸先輩の皆さん方に深く敬意を表し、さらに今後も皆さん方のご活躍に期待をいたし、若き世代の方々の資料となることを祈念いたしまして、30周年記念誌発刊のお祝いの言葉といたします。

目 次

記念誌発刊にあたって	社南公民館館長	竹内 寛
発刊によせて	福井市長	東村 新一
発刊によせて	福井市教育長	内田 高義
記念誌発刊によせて	社南地区自治会連合会会長	山田 秀実
第1章 社南地区の歴史と移り変わり		1
古墳時代に入って生活圏広がる		
繼体天皇とのかかわり		
道守庄時代の地名 今も		
中世になって社庄に		
北朝方の江守城		
天保の飢饉被害最小		
明治時代・地租改正で混乱		
だるま屋百貨店の創設者・坪川信一		
福井大空襲		
福井地震の被害甚大		
福井国体を契機に大きく変貌		
増加する地域人口		
市街化進む		
30年に運動公園メインに再び国体開催		
第2章 社南公民館の誕生とあゆみ		9
第1節 社南公民館の歴史		9
1 わが国の公民館の誕生		
2 福井市・福井市周辺部の公民館の誕生		
3 社公民館の誕生		
4 社南公民館の完成		
5 社南公民館増改修工事が完成		
6 文部大臣表彰を受賞		
7 社南公民館創立30周年記念事業の概要		

第2節 社南公民館の活動	16
1 教育事業	
・ 家庭教育支援事業(つくしんぼ)	
・ 青少年健全育成教育事業(ナウナウ寺子屋)	
・ 青少年健全育成教育事業(社南ジュニアリーダーズクラブ)	
・ 健康長寿事業(えもり学級)	
・ 豊かな地域づくり事業(社南塾)	
・ 成人教育事業(婦人学級 アイアイサロン)	
・ 成人教育事業(壮年学級 サウス・ジー・シー)	
2 自主グループの活動	
3 地区事業	
・ 納涼祭	
・ 敬老会	
・ 体育祭	
・ 公民館まつり	
・ 年賀式	
・ 社地区戦没者追悼式	
4 公民館だより(平成21年度)	
第3節 社南公民館の運営	86
1 公民館運営審議会	
2 公民館協力委員	
3 歴代の館長・主事・管理人	
 第3章 地域との連携	89
第1節 社南地区自治会連合会の活動	89
第2節 社南地区諸団体の活動	94
1 社南地区社会福祉協議会	
2 社南体育振興会	
3 福井南交通安全協会 社南分会	
4 社南青少年育成市民会議	
5 社南老人連合会	
6 社南壮年連絡協議会	
7 社南子ども会育成会	
8 社南教育メディア連絡協議会	

- 9 社南地区補導員連絡協議会
- 10 福井市消防団 社南分団
- 11 福井市防犯隊 社南支隊
- 12 社南婦人会
- 13 社南地区保健衛生推進員会
- 14 社南地区子育て支援委員会
- 15 社南地区伝統文化委員会
- 16 社南地区学校環境支援協議会
- 17 社南地区食生活改善推進員会
- 18 社南身障者福祉協会
- 19 社民生児童委員協議会

第3節 社南地区の学校教育・社会福祉関係団体等の活動 150

- 1 社南小学校・P T A
- 2 至民中学校・P T A
- 3 社南スポーツ少年団
 - ・ 野球部(社南ビクトリー)
 - ・ 社南ジュニアソフトボールクラブ(社南イーグルス)
 - ・ 社南J r . バレーボール スポーツ少年団(男子)
 - ・ 社南ジュニアバレー ボール(女子)
 - ・ 江守の里少年剣道教室(社南江守の里剣道スポーツ少年団)
 - ・ 社南ジュニアバドミントン
- 4 福井市 社保育園
- 5 社会福祉法人 社中央保育園
- 6 福井市特別(へき地)保育所 南居保育園
- 7 社会福祉法人育幼福祉会 あさかぜ保育園
- 8 福井市つばき児童館
- 9 あさかぜ社南児童クラブ
- 10 のびっ子クラブ社南

第4節 社南地区のまちづくり事業 178

- 1 福井市市民憲章によるまちづくり事業
- 2 ふるさとおこし“4 2”推進事業
- 3 うらがまちづくり推進事業
- 4 うらがまちづくり支援事業
- 5 21世紀わがまち夢プラン推進事業

6	住みたくなるまちづくり全国交流大会
7	夢・創造事業
8	誇りと夢・わがまち創造事業
9	社南地区自主防災会連絡協議会
10	社南地区防災アマ無線クラブ
11	狐川を美しくする会
12	狐川流域まちづくり協議会
第4章 資 料 209	
	社南公民館30年のあゆみ
	社南地区の人口・世帯の推移
	社南地区年齢別人口・高齢化率
	歴代社南公民館運営審議会委員名列
	歴代社南地区自治会連合会役員名列
	平成21年 社南地区自治会長・役員名列
	平成21年度 社南地区団体長名列
	社南地区民生委員・児童委員名列
	平成21年度 社南地区福祉委員名列
	平成21年度 社南未来委員会役員名列
	平成21年度 社南地区自主防災会連絡協議会・防災アマ無線クラブ役員名列
	平成21年度 社南地区自主防災会会长名列
	社南公民館創立30周年記念事業記念誌編集委員会名列
	社南公民館創立30周年記念事業イベント委員会名列
	社南公民館創立30周年表彰規定
	福井市市民憲章
	社南地区21世紀憲章
	福井市長寿社会憲章
	福井市こども憲章
	社南音頭
	参考文献 231
	編集後記 232

第1章

社南地区の歴史と移り変わり

第1章 社南地区の歴史と移り変わり

私たちの住んでいる社南地区は、一体どんな歴史を歩んできたのだろうか。そのルーツを知ることは、私たちはもちろん、子供たちやさらにその先に続く世代にとっても大事なことに違いない。なぜなら、地域への愛着が一層深まるだろうし、さらには地域を発展させ、新しい歴史を後世へ繋ぐためにも欠かせない事だろう。それは私たちの責任でもある。当地区に関する資料は限られているが、大事なポイントは押さえながら、なるべく史実に沿って簡潔にまとめてみた。

<古墳時代に入って生活圏広がる>

まずその出発点は、遠く12,000年前の縄文時代から始まる。この時代は約10,000年も続く。本県では三方町の鳥浜貝塚(5,500年前)が有名だが、残念ながら当地区内には確たる形の縄文遺跡は現在のところ発見されていない。だが、福地籍の「福遺跡」は縄文の痕跡を残すものとして報告されている。それは1916年(大正5年)に狐川の自然堤防が洪水で決壊した際に流れ込んだ土砂の中に縄文土器が混在していたことから、この近くに遺跡があつただろうという推定で、遺跡そのものは洪水等で消失したか破壊されたか、見つかっていない。さらに下って弥生時代(紀元前300年~300年前半)の遺跡も少ない。平成6年に県埋蔵文化財センターが調査、発見した南江守町の「大槻(おおまき)遺跡」が唯一のもの。江端川沿いで見つかった弥生後期から古墳時代前期の集落跡といわれている。

しかし、古墳時代(4~6世紀後半)になると、多くの遺跡が登場する。まず古墳時代初頭のものとして下江守町で見つかった墳墓群・下山遺跡がある。昭和36年の調査で確認されたが、その後破壊された。古墳時代中期になると当地区も俄然活気づいてくる。近くの足羽山古墳群や兎越山古墳群、さらには西谷古墳を含む八幡山古墳群が同時代中期の古墳として次々と登場する。八幡山には円墳14基、方墳5基が集中しており、兎越山はさらに24基もの円墳等が頂上に列を成すように広がっていたという。したがって2,300年ほど前の古墳時代になって、ようやくこの地に古代人が住み着き、その生活圏が広がっていたと推測できる。この頃は大和朝廷の国家統一が進んだ時代もあり、同古墳はこの辺一帯を治めていた豪族の墳墓だったと考えられている。



西谷古墳の発掘調査で出土した石棺
(昭和58年6月)

<繼体天皇とのかかわり>

大和朝廷の国家統一に絡んで、地方豪族として初めて中央に進出するのが越の國の大王・繼体である。奈良時代初期に著された「日本書紀」や「古事記」に、越の國から大和朝廷の天皇となる繼体伝説がある。6世紀初頭、武烈天皇の崩御を受けて大和朝廷の重臣らの推挙で第26代天皇として即位する。それまでは男大迹(オオト)王と呼ばれ、越の國の大王として権勢を誇った。福井平野を流れる三大河川・九頭竜川、日野川、足羽川の治水・灌漑事業を行ったといわれており、当地区も多大な恩恵を受けたようだ。足羽山にある足羽神社は繼体天皇を主神としており、男大迹王が福井を去った後は皇女・馬来田媛に神事を託したという。足羽山のふもとに広がる社地区は足羽神社とのつながりを一層深め、馬来田媛が神官となってから社北地区の5区と社南地区の門前、福は社ノ郷となり、さらに足羽ノ庄と呼ばれた。福町や門前町の氏神は男大迹王を祭神としているほか、南居の地名は男大迹王の妃・三尾ノ君が一時住んでいた所で、足羽神社の南という意味から付いたものという=足羽社記略=。だが、これは「足羽社記略」(1711年)を著した足羽神社の第47代神主・牧田敬明が平安時代に作られた「延喜式神明帳」に出てくる「足羽郡直野神社の直野村は名呉能村(現在の南居町)のことであり、男大迹王の妃・三尾ノ君を祀る神社であるとして、地名の由来等を説明しているが、真偽は不明」(日本地名大系・福井県の地名=平凡社刊)としている。さらに最近、南居町出身で東京在住の横山敏男氏が自費出版した「わがふるさと越前・福井の歴史の流れ」と題する本の中で「足羽社記略は、こじつけが多く信憑性に疑問あり」と指摘している。足羽社記略の記述を疑問視する見方が多く、あくまでも伝説の域を出ないが、繼体天皇と当地区のかかわりがあったことは否めないだろう。

<道守庄時代の地名 今も>

8世紀、奈良時代になって東大寺が建立されると、東大寺の勢力が全国に広がり、越前(加賀の一部を含む)には1,020町及ぶ東大寺領荘園が置かれる。当地区など旧社村一体には道守庄、六条地区には糞置庄などが置かれた。中でも道守庄は326町という大荘園であった。昭和43年開催の福井国体を前に4次にわたって発掘調査が行われ、その報告書に詳しいが、稻作に重要な用水溝跡がいくつも発掘されるなどの成果を挙げている。奈良時代に作成された「越前国足羽郡道守村開田地図」(正倉院蔵)が残っており、社地区の今の地名がいくつも出てくるうえ、地形も当時と似通っている。この貴重な資料のおかげで1,300年の時空を超えて奈良時代がタイムスリップしてくるような不思議な感覚にさえなる。

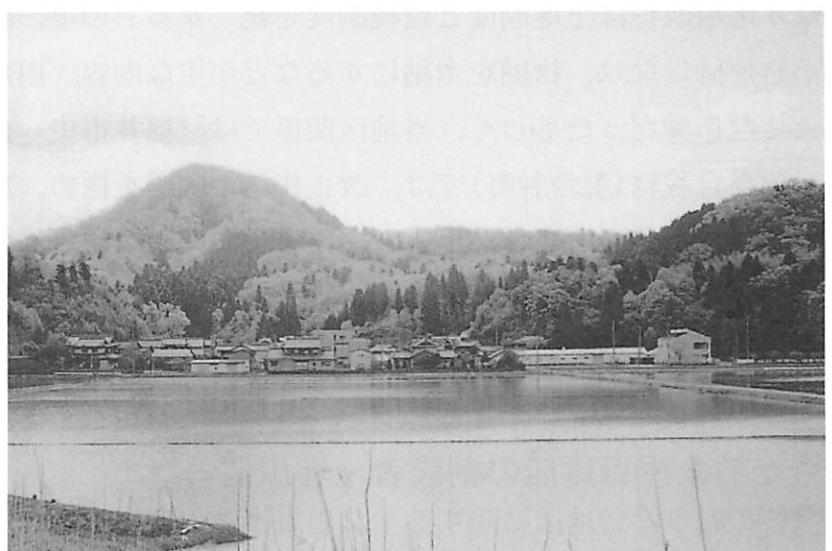
<中世になって社庄に>

こうした東大寺荘園も、鎌倉時代(1192年～)になると衰微し、代わって皇室や大寺社の荘園が出現する。隣接する木田地区には奈良・興福寺領の木田庄が置かれるなど、県内各地の荘園は大きく様変わりした。当地区の大部分は社庄と呼ばれた。社とは足羽神社のことを指し、従って足羽神社の神領として、外部勢力の支配を許さなかったということだろう。しかし、室町時代(1336年～)になると、全国を制圧した足利義満が社庄を京都・北野神社に寄進して同神社領となつた。さらに戦国時代には朝倉氏が実効支配する。また、南江守、下江守、江守中、種池、渕、西谷、舞屋の八村は朝倉氏の家臣・江守惣兵衛の所領となり、江守郷と呼ばれるなど、当地区も時代の波に大きくもまれたようだ。

<北朝方の江守城>

南北朝時代(1335年～)には、今の福井市周辺に黒丸城、安居城など北朝方の拠点として足羽七城が置かれたが、南江守町と南居町などにかかる城山(標高約202メートル)の江守城もその一つと言われている。「太平記」によれば1338年、南朝方の新田義貞軍約5,000騎が足羽七城を攻め込み、江守城もその時落城したという。その義貞も盛り返した北朝方に追われ、現福井市新田塚付近で討たれて、南北朝の騒乱は終止符を打つ。時代はさらに織田信長、豊臣秀吉の安土・桃山時代(1568年～)へと続く。信長の時代はその重臣・柴田勝家が北の庄に築城し越前を支配したが、本能寺の変で信長が明智光秀に殺されると、勝家は羽柴秀吉(後の豊臣秀吉)に滅ぼされてしまう。

この時代で特筆すべきは、豊臣秀吉が行った太閤検地だろう。越前検地は慶長3年(1598年)に行われた。当地区では、この検地に貢献した庄屋に対して農地が下賜されたという。この農地は徳川時代になっても特別に年貢米が免除されていたと地元の古老が伝えている。太閤検地では田畠や屋敷の面積までも測量し、米の等級や取れ高なども厳密に調査して村高が決められ、年貢徵収の基盤が確立された。現在でも通用する一反300歩は太閤検地で決まった農地面積の単位だ。この検地によって、それまでの荘園制度は完全に消えた。



南北朝時代に築かれた江守城のあった城山

<天保の飢饉被害最小>

江戸時代は17世紀初頭から約260年も続く。この時代、当地区に関連するものとして挙げれば、南北朝時代に築かれ、落城した江守城の麓に越前藩の初代藩主・結城秀康と二代藩主・忠直の重臣であった吉田修理が1万4千石を与えられ、陣屋(南江守町の犁神社辺り)を構えていた。さらに大きな出来事としては、天保の飢饉(1835~39年)がある。享保、天明を併せて3大飢饉と言われ、全国的に多くの餓死者を出した。江戸時代に書かれた天保飢饉録によれば、本県では5年間の合計で福井藩6万人余、府中(武生)3,500人などと驚くような餓死者数が上がっている。福井藩の場合、餓死者は藩人口の実に3割に達したという。しかし、最近書かれた「天保の飢饉と餓死者数について」(1996年、佐久高士・福井大学教授著)では、分かっている近世後半の死亡率調査を基に推計すると、実際はもっと少なかつただろうとしている。

当地区に関しては、同書の「天保の飢饉と餓死者数」に一部だが出てくる。同書は県内を都市部と農村部に分けて餓死者数を記録している。これによると、福井1,421人、武生1,421人、敦賀774人(いずれも5年間の合計)などが目立って多い。農村の部で多いのは開発165人、灯明寺132人、和田中93人などとなっているが、当社南地区では福5人、西谷5人、南居1人、江守1人だけ。江守とは江守中か南江守か判然としないが、それでも他地域の餓死者数と比較しても非常に少ない。当地区的他の地名が上がっていないのは、餓死者が全くなかったということなのだろうか。これ以上詳しい資料がないので分からぬが、当時の庄屋らを中心とした助け合いで犠牲者を最小限に食い止めたのではないかという想像もできる。だとしたら、すばらしいことだ。

<明治時代・地租改正で混乱>

1868年、明治時代に入ると、近代化へのさまざまな変革が始まる。中でも国の根幹をなす地租改正は土地制度と租税制度を統一するもので、課税の対象がそれまでの収穫高から地価になり、物納を金納にするなどが主な内容。田畠の測量を一切やり直すなど、大変な作業だったらしく、当地区関係では「福井市史 近現代」に取り上げられている足羽郡合谷村(現合谷町)では、改正作業が困難を極め、期限までに間に合わない状態となり、戸長が役所に呼び出され、作業を急ぐよう厳しく促されたとある。同22年明治憲法が発布され、前年には新体制を支える地方自治の仕組みである市制・町村制が公布された。この時の社村(社南、社北、社西全体)は戸数979、人口5,134人だった。

<だるま屋百貨店の創設者・坪川信一>

この記事は当地区に関する主な出来事を、資料を繰りながら歴年でピックアップしているが、大正時代については全く記述がなかった。昭和に入って、県内では最初のデパー

トとして同3年7月に開店した「だるま屋」百貨店(現在の西武デパート)は、種池町生まれの坪川信一氏が創設者である。単なる百貨店としてだけでなく、「子供本位の百貨店」を経営方針に掲げ、だるま屋少女歌劇を創設するなど、ユニークな経営で市民に愛される百貨店として全国的にも注目を集めた。

<福井大空襲>

洋の東西を問わず、人間の長い歴史の中で忌まわしい戦争が何度も繰り返されてきた。われわれ日本人にとって一番悲惨な経験をしたのは、あの世界第二次大戦における太平洋戦争である。昭和16年12月8日にハワイの真珠湾とマレー半島を奇襲攻撃して始まった同戦争は、昭和20年8月6日広島、同8月9日長崎への原爆投下、そしてポツダム宣言受諾という形で戦争終結をみたのである。この戦争で福井市が同年7月19日夜、米軍の爆撃機・B29が120機という大編隊で攻撃を繰り返し、「県衛生行政概況」によれば、当時の人口96,940人の93.2%に当たる93,038人が被災した。住宅の焼失率もなんと96%と市の大半が焼野原と化したという。この空襲での焼死者は約2,000人、けが人は5,000

人を超えた。

当地区はまだ足羽郡社村であった時代で、福井市の空襲では直接的な被害の記録はない。ただ、福井市中心部から4~5キロしか離れていないため、市中心部が雨のように降り注ぐ焼夷弾攻撃で町が赤々と燃え上がる様子に震え上がったという。当時、幼児だった当地区住民の話では「防空頭巾を



B29の爆撃で焼野原と化した(左の建物は旧福井市役所)

かぶり母親におんぶされて防空壕に入ると、頭上を旋回しながら飛んで行くB29の胴体がクジラのお腹を見上げたような感じだった」とその恐怖体験を話している。「福井空襲史」(福井空襲史刊行会、昭和53年発行)の中に「<福井市の空襲を周辺町村はどういうに見ていたか>」という調査報告があり、当時の社村からは「昭和20年7月19日午後9時頃空襲警報が発令され、琵琶湖方面から侵入したB29の大編隊が文字通り波状攻撃をかけてきた。1機、2機、3機と、わが社村南方面から福井市に接近するとみるやいなや焼夷弾の投下らしくパラパラ、シューとうなりを生じ、火の玉が落ちる。その火の玉は花火のようにパッと開いて大空を真紅に染め、それが雲海に反映する。落下したとみるや市内各地は火の海と化したのであろうか、爆弾の炸裂音や火災による地上物の破裂音やらものすごい大音響だ。凄惨極まりない、全く目を覆うばかりである。」(以下省略)

さらに同書によれば、ただちに始まった戦災地の復旧作業で、「社村警防団が立矢方

面、山奥方面に出動し消防ポンプによって延焼防止に必死の活動を続けた。20日より3日間は約100名の応援隊を組織し、死体の運搬、焼け跡の片づけ等に極力応援を行った」と報告している。

＜福井地震の被害甚大＞

太平洋戦争の敗戦覚めやらぬ昭和23年6月28日午後4時14分、嶺北地方を中心にマグニチュード7.3の直下型地震が発生した。今年3月に発生した東日本大震災はマグニチュード8.9という超巨大地震で、しかも大津波を伴う複合災害となり、福島第一原子力発電所がメルトダウン(炉心溶融)し、放射能汚染が広がるという未曾有の危機に見舞われている。これと比較



廃墟と化した福井市中心街(向かって右に見えるのが人絹会館)

すれば、福井地震はやや小さく感じるかもしれないが、記憶に新しい平成7年1月の阪神・淡路大震災にも匹敵する激震だった。死者3,579人、負傷者16,293人、全壊家屋35,188戸など、本県地方に大きな被害をもたらした。福井市全体では930人が亡くなったが、当時の社村の被害状況は死者22人、重軽傷者129人、全壊家屋354戸、半壊387戸に達した。社南小学校も校舎が傾き、何年もの間、太い木製支柱が5メートル間隔ぐらいで校舎を倒れないように支えていたので、他校の児童から“つんばり学校”と呼ばれたこともある。

＜福井国体を契機に大きく変貌＞

昭和29年4月、足羽郡社村は福井市に編入合併する。社村は福井市社地区として新しくスタートした。30年代に入ると、時代は落ち着いて高度経済成長へと大きくかじを切る。純農村地帯だった当地区も国の工業化政策を受け、都市部に働きに出る人が増えるなど、農業の就業形態に変化が出始めた。昭和43年には、福井国体が当地区をメイン会場に開催されたが、これが当地区的変貌を決定的なものにした。西環状線など道路網が整備され、会場跡地は運動公園として生まれ変わり、県営アパートや一般住宅が周辺を取り囲むように立ち並んだ。国体前の昭和41年に渕団地、福団地が相次いで出来たのを皮切りに同51年までの10年間に社地区全体では17もの住宅団地が次々と誕生した。

当然ながら、農業は大きく後退し、人口は大幅に増加した。詳しい数値は第4章の参

考資料に掲載しているので、変化の大きいものだけピックアップしてみよう。まず農業では、福井市に合併する前の昭和27年の耕作面積は650ヘクタール、農家戸数591戸で総戸数852戸の約70%を占める純農村地帯だった。しかし、国体のあった翌年の44年には耕作面積550ヘクタール、農家戸数533戸、さらに15年後の昭和59年には耕作面積434ヘクタール、農家戸数521戸にまで減っている。昭和27年と比べ、耕作面積だけを見ると約15年間隔で100ヘクタールずつ減っている。農家戸数は27年から44年の17年間で70戸の減少で、耕作面積の激減に比べれば以外に少ないと言えるだろう。だが、その実態を詳しくみると専業農家は306戸だったものが、たった2戸と激減している。特に昭和57年から始まった区画整理事業によって、市街化区域に入った農地は次々と埋め立てられ、残った農地は細々と維持されているのが現状だ。

<増加する地域人口>

一方、人口の推移をみてみると、初の国勢調査は大正9年から始まったが、その後5年ごとに行われており、第3回目の昭和5年の記録をみると、社村の総人口は4,139人で、同20年には5,799人と、15年間で660人の増加をみている。しかし、同25年の調査では4,463人と1,336人も減少している。理由は判然としないが、推測するに太平洋戦争での犠牲者や戦中戦後の食料難、医療事情の悪さによる病死などが原因ではないかと思われる。福井市に合併した29年の社地区の人口は4,317人と相変わらずわずかながら減っている。昭和30年代に入ると、敗戦と震災の傷跡もだんだん癒えて、福井市も復興期へと向かう。30年代の人口の推移が気になるところだが、福井市が地区別人口調査を始めたのは同55年からで、それまでは公的記録がない。

したがって、40年代の社地区の人口も記録がないが、46年以降は町名単位の人口統計が残っており、地区内の町名を拾い出して合計するという方法で算出した結果、社南地区だけで同46年は5,624人、47年6,184人、48年7,019人、49年7,338人、50年7,740人と着実に増加している。前段でも書いたように社地区が大きく変わるきっかけとなったのは福井国体開催による周辺の開発による。昭和55年には社地区全体で5,165世帯、人口18,761人に達し、社地区は社南、社北の2地区に分割された。それでも社南地区は人口11,390人と1万人の大台を超え、平成3年にはさらに社西地区が誕生し、旧社地区は3分割されて現在に至っている。市中心部をはじめ他地区が人口減少している中で、当地区の人口増加は際立っており、平成22年は12,608人に達している。

<市街化進む>

社地区が人口増で南北に分割された翌年の57年から無計画な市街地のスプロール化を緩和し、計画的な街づくりをする一環として南北社地区全体を対象にした土地区画整理



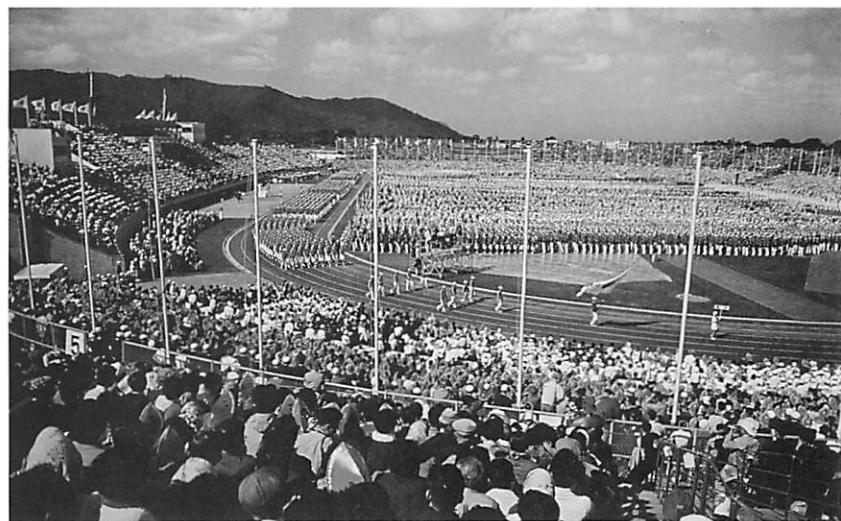
街路樹も整いすっかりきれいになった街並み

事業が10年計画でスタートした。社南地区には総事業費約80億2千万円が投入された。特に市中心部から車で10～15分と、通勤通学にも便利なうえ自然環境にも恵まれており、良好な住宅地として位置づけられ、開発が進められた。従って、用途地域の指定でも第一種住宅専用地域と住居地域を合わせ、全体の約79%と福井市のベッドタウンとして住環境を重点にした整備が行わ

れた。ショッピングセンター・ベルから当地区に入る西環状線は当地区の中央を縦断するように走っているが、道路両側には近隣商業地域としてスーパーマーケット、量販店、大型電気店をはじめ飲食店や娯楽施設、衣料品店などさまざまな店舗が立ち並び、商店街組合「グリーンロードやしろ」も結成された。当初計画では、事業終了後は57年度人口3,740人の約2.4倍の8,900人を見込んでいたが、前段で書いた平成22年度の人口は予想を遥かに上回る約3.4倍に達している。

<30年に運動公園メインに再び国体開催>

今年の本県最大の話題の一つは、7年後の30年度に福井国体の開催が決まったことだろう。昭和43年に第1回目の福井国体が開催されて以来、実に51年ぶりである。県を中心受け入れ準備が始まったようだが、メイン会場はやはり運動公園陸上競技場が決まっている。前回から半世紀が過ぎたが、当時の興奮がさまざまとよみがえってくる。国内最大のスポーツの祭典である。陸上競技場をはじめとする周辺施設のリニューアル、道路網の整備、選手団の受け入れなど、特に社3地区は当該地区として関わりが深いはずである。2回目の福井国体をどう成功させるか。福井独自の国体となるよう知恵と工夫を重ねなければならない。当地区にとっては、新しい地域づくりへさらに大きく飛躍するチャンスもある。



昭和43年10月福井運動公園陸上競技場をメイン会場に開かれた
福井国体開会式の全景